

毒と私

由井寅子

Haison and Me
Torako Yui

山口県乳児死亡事件をきっかけに「ホメオパシー」は、
いつしか“悪質療法”に変えられた——

なぜ真相は 葬られたのか？

日本にホメオパシーを広めたカリスマが
いま、日本の闇を明らかにする！



幻冬舎  定価(本体1200円+税)

はじめに

山口県新生児死亡訴訟を受けて

2009年10月16日、山口市で一人の赤ちゃんが死亡しました。病院の診断は急性硬膜下血腫。わずか生後2カ月のことでした。

赤ちゃんが生まれたのは8月3日。33歳の母親にとっての第二子でした。母親は自然療法への志向性を持ち、産婦人科医でなく助産師のもとでの出産を望み、自宅出産を行いました。3年前に生まれた第一子も、同じ助産師にとりあげてもらいました。

2010年5月、母親は助産師を相手に、約5600万円の支払いを求める損害賠償請求訴訟を起こしました。

突如、被告となった43歳の助産師は、日本助産師会に属する正規の助産師で、また、私たちが所属する日本ホメオパシー医学協会（JPHMA）が認定するホメオパス（ホメオパシー療法家）でもありました。原告である母親もまた、第一子出産以来2年の間、私たちが運営する「ホメオパシーとらのこ会」の会員となりました。

7月9日、この訴訟を『読売新聞』が報道しました。それによると、訴訟の原因は、助産師が「ビタミンKを投与せず」、女兒が「ビタミンK欠乏性出血症と診断され」死亡したことにありました。続いて7月31日、朝日新聞が、助産師がホメオパシー療法を用いていたことを紹介する記事を掲載すると、ネットを中心にホメオパシーへのバッシングが始まりました。この事件が起こる前は、自然分娩を推進する助産師や産婦人科の先生のなかには、新生児への影響を考え、ホメオパシーと関係なくビタミンKを与えない人も多くいました。

マスコミの報道には、私たちの把握している事実と異なる点がいくつかありますが、その指摘は後にして、まず事実に基づく訴訟の推移を簡単に述べます。

2010年9月、この事件を受けた日本小児科学会は、新生児の脳出血などを予防するためのビタミンK投与について、「生後1ヵ月までに3回」とするそれまでの指針を、「生後3ヵ月まで毎週1回」と、投与期間の延長と回数を増やす改定を行いました。

一方、訴訟を起こしたとき、原告の母親は第三子を妊娠していました。今回、彼女は病院の産婦人科医のもとで出産を行いました。生まれた子どもは、おそらく改定後の投与方法に準じてビタミンKを十分に与えられたことでしょう。ところが、この第三子も生後4ヵ月で死亡してしまっただけです。

第三子が亡くなられた直後、原告（母親）は、被告（助産師）と和解をしました。以前か

ら私は、母親本人にビタミンK投与の是非をきちんと確認したのだから、会員本人、そしてホメオパシーの名誉を守るためにも徹底的に事実を明らかにすべきと説いていました。これに対し日本助産師会の弁護士は、穏便に済ませるべきであると主張し、被告の助産師は和解案を受け入れました。訴訟の当事者は私ではないので、それ以上の介入はできませんでした。2010年12月21日、和解が成立しました。そして和解が成立した後に、私は第三子が死亡していた事実を知りました。

以上が、私たちの把握している事実です。本当に痛ましい出来事であり、亡くなられたお子様に対しては、心よりご冥福をお祈り致します。

その後、日本小児科学会は、ビタミンK₂の投与について、2011年1月19日付で会員用ページに修正版を出し、明確な理由を明示しないまま、旧来の投与法に戻しました。

なぜ、日本小児科学会は、改定したばかりの新しい投与法を突然取り下げ、旧来の投与法に戻したのか？ これはあくまでも私の推測ですが、新しい投与法に伴い、ビタミンKの副作用（たとえば核黄疸「新生児黄疸の重症型」など）が出た可能性が疑われます。そうでもない限り、あの状況で旧来の投与法に戻すことは考えにくいからです。

本件は、被告の助産師が日本助産師会とJPHMAのいずれにも属する会員であったこと、

そして両団体の立場に違いがあったこと、とはいえ当事者（被告）はあくまでも助産師個人であったこと、および、損害賠償の対応は日本助産師会の弁護士と職業保険が行ったこと、にもかかわらずマスコミによってホメオパシーを叩く報道が行われたことなどから、私としても非常に隔靴搔痒かつかさようの感がありました。

私たち1100名の会員（600名のプロの認定会員と500名の専門会員）を持つJPHMAは、今回の一連の報道によるホメオパシー・バッシング、および、それによって影響を受けた多くの人からの誹謗中傷によってたくさんのお客様を受けました。また、約5万人のホメオパシーを愛する一般の「ホメオパシーとらの会」の会員も、家族や周囲の人から批判され、苦しい立場に立たされています。それでも、私たちホメオパシーを行うものは、この軋轢あやうの中から多くのことを学びました。

和解成立直後、12月22日の『朝日新聞』に、「ホメオパシーで長女死亡」という見出しの記事が掲載されました。とてもショックでした。新聞などのメディアがホメオパシーの社会的信用を失墜させようとする動きに対して、私たちができることといえば、私たちのホームページ上で発行している「ホメオパシー新聞」で事実を書くことしかありませんでした。

私は、もし、原告の母親がホメオパシーに抱いている本当のお気持ち語っていただける

なら、ホメオパシーの名誉を回復することができると考えていました。というのは、彼女は3年間ホメオパシーを使っていられなかったと聞いており、ホメオパシーの良さを知っているはずだと信じるからです。実際、この母親は裁判を起こす前、自分がこのように騒ぐことでホメオパシーが使えなくなるのではないかと、助産師に対して懸念する発言をされていました。

もし、「ホメオパシーで長女死亡」という『朝日新聞』の見出しに対して、「ホメオパシーで死んだのではない」と彼女が真実を述べてくれるのであれば、ホメオパシーが救われるのではないかと、そして、日本でホメオパシーを行うホメオパスたちにも、大きな希望が湧いてくるのではないかと考えました。

さらに、心や体を癒やすホメオパシーへの否定的イメージがいくばくかでも晴れ、興味を持ってくれる人がいるなら、それらの人々および彼らにとって大切な人々にその恩恵が行き届くと考え、私は母親宛に手紙を出しました。残念なことに、いまだお返事はいただけません。その後、このご家族は夫の母国であるアフリカに行かれたと聞いています。

現在のところ、残されたのは、ホメオパシーに対するネット上のバッシングと偏見の目だけです。自己治癒力を使って病める人々が良くなっていくことを願う私たちの活動に、この事件は大きな障害をもたらしました。

では、私たちの知る事実と一連の報道がどのような内容だったのか、簡単に見てみます。

《報道内容》

- 乳児の死亡原因となった急性硬膜下血腫を引き起こしたのは、ビタミンK₂シロップの不投与によるビタミンK欠乏性出血症である。

《私たちが知る事実》

乳児の死亡原因となった急性硬膜下血腫を引き起こしたのは、ビタミンK₂シロップの不投与による「ビタミンK欠乏性出血症」であったかどうかは、証明されていません。乳児の検死は行われず、訴状にも医師による診断書は添付されていませんでした。

そもそもビタミンKを投与していても出血を起こす事例は、いくつも報告されています。昭和63年度厚生省心身障害研究の「第3回乳児ビタミンK欠乏性出血症全国調査成績」によると、昭和60年7月～63年6月までの3年間に、突発性ビタミンK欠乏出血症は126例あり、そのうち16例ではビタミンKが投与されていました。

また、生後まもない赤ちゃんに、出血を防止するために人工物を投与することが、本当に悪影響をもたらすことはないのでしょうか。K₂シロップは副作用がないといわれています

が、長期的に見ても安全なのは、誰にもわかりません。

もしK₂シロップにそこまでの必要性があるのなら、国は投与を義務化すべきと考えますが、義務でない現状では、人工物を摂取しない自由は、自己責任の範囲内で、誰にでも認められているはずで

《報道内容》

● 助産師は、母親の同意をとらずに、ビタミンK₂シロップの代わりにホメオパシーの「レメデー」を与えた。そのうえで母子手帳には「ビタミンK₂投与」と記述した。

《私たちが知る事実》

助産師は、「母親の意向」のもとに、ビタミンK₂シロップを与えるのをやめたと聞いています。当然、ビタミンK₂シロップの意義と、とらない場合のリスクも説明して、投与の意向を問うたうえのことです。

前述のように母親は自然志向を持ち、乳児に対して「自然な出産」にないものを与えることを喜びませんでした。そのため、第一子の出産時もビタミンK₂シロップは与えませんでした。ちなみに第一子のときはレメデーをとることも希望されなかったので、レメデー

も与えませんでした（後に説明しますが、レメディーとは、ホメオパシー療法で使う砂糖玉です）。

母子手帳に「ビタミンK₂投与」と助産師が記述したのは、医師の診察時に母親の同意なく投与されてしまうのを防ぐためでした。

私たちはレメディーが、ビタミンK₂シロップの代替物になるとは考えていません。

そもそも物質とレメディーでは体への働きが異なります。物質の栄養吸収を高めるためにレメディーをとることはあっても、物質そのものの代替物にならないことはホメオパスであれば当然知っています。助産師ももちろん、「レメディーがビタミンK₂シロップの代わりになる」とは言っています。この一連の誤報道は、最初に報道した記者が助産師の言ったことを歪曲して報道したことに端を発しています。

また当時、ビタミンK₂シロップの投与は助産師業務において、義務化もガイドライン化も明確になされていないものでした。第一子のときにそうであったように、この母親にはビタミンK₂シロップを拒絶する権利があり、それを行使しただけにすぎないのです。

だからといって、この事件に関し、助産師にまったく責任がないとは考えてはおりません。ビタミンK₂をとらないのは、本人の希望であるというサインをもらっておくべきであったでしょうし、母親のためとはいえ、母子手帳に「ビタミンK₂投与」と書くべきではなかつ

たと考えます。

《報道内容》

● ホメオパシーは現代医学を否定して、患者を病院から遠ざけているから有害である。

《私たちが知る事実》

いいえ、ホメオパシーは現代医学をいちがいに否定してはいません。少なくともJPHMAは、会則で病院での検査の必要性を説いていますし、骨折や臓器不全などをはじめとする現代医療が必要な重篤、あるいは緊急のケースでは、医者の治療を受けるよう指示しています。

私自身、子どもは病院の帝王切開で産みましたし、JPHMAとしても、セントマーガレット病院と提携し、現代医学と協力して患者をみる体制を整えています。

現代医学の薬で症状を抑圧すると、ホメオパシーで高めようとする自己治癒力を低下させることがあるとお伝えはしていますが、薬の摂取を止めよなどの強制はしていません。

私たちホメオパシーを使う者は、緊急を要する病気でないなら、まずは自己治癒力を使い治そうとします。何から何まで薬や病院ではなく、自分の体や心に一人ひとりが責任を持ち

自分の健康は自分で守る姿勢がとても大事だと考えています。このようなコンセプトをもとにした自然療法を使うからといって、それは現代医学の否定を意味するものではありません。仮にホメオパシーが現代医学を否定することが有害なのであれば、現代医学がホメオパシーを否定することも、患者の治療の機会を奪うという意味で、同じく有害であるはずです。なぜなら、ホメオパシーは200年の歴史と膨大な治療実績のある療法だからです。

以上の点から、今回の朝日新聞社をはじめとする新聞社によるホメオパシーに対するバッシングは、明らかに間違いであると言わざるを得ません。彼ら反対派は、ホメオパシーのレメディーは現代科学では効果が証明されていないものであると主張しています。事実は、効果ありとする多数の論文と効果なしとする少数の論文が混在している状況であります。

百歩譲って、効果なしとする論文に、より妥当性があるのでしょうか。だとしたら、なぜこれだけ多くの人が、実際に効果があったという体験をしているのでしょうか。

ホメオパシーは世界中で推定10億人が親しんでいる、漢方の次にポピュラーな療法です。イギリスにはホメオパシー専門の病院が4棟もあり、国民健康保険（NHS）も適用されています。2009年3月、イギリス議会下院科学技術委員会は、ホメオパシーの有効性に関して証拠がないため、国民健康保険の適用を外すべきだとの報告書を提出しましたが、政府

は正式にこれを却下しました。医師と患者は治療法の選択の権利を持つべきであるとの立場からです。妥当な見解だと私は思います。

ホメオパシーに反対の意見のほとんどは、ホメオパシー療法に用いられる「レメディー」原物質が残らないほどに希釈したもの」は、科学的に言えばただの砂糖玉やアルコールであり、効果があるわけがないというものです。

彼らは、自分自身レメディーを使ってみることもなく、ホメオパシーはカウンセリングであり、レメディーはプラシーボ（偽薬）効果を持つにすぎないと主張しています。

私は不思議に思います。人間はいつから、科学で解明できない事象は存在しないと結論づけられるほど偉くなったのでしょうか。なぜ、現代の科学では「まだ」解明できていないだけだと考えることができないのでしょうか。ホメオパシーには効果がないと断言できる方は、控えめに言っても傲慢との誇りを免れ得ないでしょう。

賢明な方はすぐに理解されるでしょうが、「ホメオパシーはリスクが高い」とバツシンググすることは、ナンセンスです。レメディーは天文学的に薄めているアルコール溶液を砂糖玉にたらしめたものですから、物質的な副作用はありません。

薄めていて原物質の残っていない水をとると言うのと、多くの人々は懐疑的になりますが、

実際に私の潰瘍性大腸炎は治りました。なにより、「2000年もの歴史を持ち、世界中で利用されているホメオパシー療法」という事実が物語っていることは、確かなはずです。

患者さんには、療法を選択する権利があると私は思います。現代医学が完全な治療法でないとするならなおさらです。すべての人がまったく同じ行動をとるような社会は不気味ですし、民間療法や代替医療を選ぶことができる世の中は素晴らしいと思います。

たとえば、一般的に病院での出産よりも助産院、自宅出産はリスクが高いとされていますが、だからといって自然出産を選ぶ人を非難することはできません。

また、どんな薬にも副作用というリスクがあることはご存じでしょうか。さらに、自動車のリスク、飛行機のリスクなど、リスクを挙げていけばきりがありません。

今回のホメオパシー・バッシングは「水に落ちた犬は打て」の典型です。ホメオパシー反対派の方は、このような執拗なバッシングによって、患者がホメオパシーを体験することを妨げられ、それによって治るはずの病気が治らなかつたとしたら、その責任をどのようにお取りになるつもりなのでしょうか。後ほど説明しますが、現代医学でも治療法がないといわれている発達障害ですが、私のところにやって来る発達障害の患者82名の改善率は、89%に達します。

ホメオパシーには、日本を含む世界中で膨大な治療実績があります。物質の入っていない砂糖玉だから効果があるわけがないという先入観だけで、きちんと自らが体験し調査することもなく否定するのはナンセンスです。

本書は、日本にホメオパシーを本格的に導入し、15年間教育してきた私、由井寅子が、ホメオパシーとは何か、また、私はいかにしてホメオパシーに出合い、その身を捧げるようになったかをわかりやすくまとめたものです。

私は本書を『毒と私』と名づけました。「毒」とは、このバッシングの中でホメオパシーに張られたレッテルです。一般に、「毒」とは体を害するものと考えられていますが、私はむしろ「毒」は体に、そして自分自身に「気づき」を与えてくれるものと考えます。その意味は本書を読み進めるなかで、次第に判明していくことでしよう（これから登場するホメオパシーに関する一連の新聞・ブログ記事などは、公平を期すために、その必要箇所を原文のまま抜粋しております）。

ホメオパシーについて知っている方にも、知らない方にも一人でも多くの方に、私が考える健康と幸せについて知っていただきたいと思っています。

目次

はじめに 山口県新生児死亡訴訟を受けて・001

第1章

苦しみを

のみ込むな！

「いらん子」と呼ばれて・020

「母」という人・024

母親に拒絶され続けた子ども・028

〃死〃が身近にあった子ども時代・032

愛情を与えられない子どもの悲しみ・036

目の前で母親がレイプされた・040

母の家出・044

男なんか信用できない・046

田舎からの上京・049

誰も助けてくれない・052

働くだけで喜びのない日々・054

潰瘍性大腸炎に侵されて・057

ホメオパシーとの出会い・061

第2章

自分を

解放しろ！

自分の体を見つめ直せたロンドンでの生活・066

心を解放するということ・070

私が学んだホリスティックなグロウバル療法・076

子どもたちの誕生・081

広がる輪・084

故国への還元・088

差別と偏見・093

浸透と確立・097

第3章

気づけ！

すべてがゆがんでいる！

手荒いバッシングはなぜ起きたのか？・102

『朝日新聞』からの奇妙な取材・106

新聞報道の欺瞞・109

暴かれた嘘・113

ホメオパシーの被害は存在するのか？・115

「科学的」な論文？・120

ホメオパシーとは何か・124

現代医学とホメオパシー・131

症状と好転反応・136

求められる科学的な効果・141

ホメオパシーへの火は消えない・146

第4章

目覚めよ！

事なかれ主義の日本人たち！

なぜ人々が求めるのか・154

予防接種は「安全」か？・158

予防接種は「効く」のか？・162

予防接種の危険性・167

予防接種の仕組み・171

免疫とアレルギー・174

子どもの身を守るために・177

他人の言をうのみにするな・182

日本を滅ぼすのは誰だ？・187

第5章

愛に生きろ！

心の治療をする・198

私の抱えてきた傷・202

トラウマを癒やしていく・207

感情を解放する・211

毒が気づきをもたらす・217

魂は存在するか・219

執着を手放す・224

逆さ縁を解消する・226

負けて勝つ・230

自分自身を許す・235

おわりに 自分自身を生きること・243

装丁
松崎理

第 1 章

苦しみを
のみ込むな！

「いらん子」と呼ばれて

私が生まれた地は愛媛県の瀬戸町という田舎の小さな村です。日本地図で四国のページを開くと、北西に位置する愛媛県の西端に、手でつまむとぽつきりと折れそうなほどに細長く伸びた半島があります。国定公園であるこの佐田岬半島の真ん中に位置していたのが私の生まれ故郷である瀬戸町です。厳しい環境でしたが、美しいだんだん畑の日本の風景があり、自然と人間が共存して生きていました。

2005年に瀬戸町は、半島の根元にあった旧・伊方町、半島の先端にあった三崎町と三町が合併して、新たに半島全域をカバーする伊方町の一部となりましたが、当時は、半島の付け根にある八幡浜市から車で何時間もかかるような陸の孤島でした。鉄道も高速道路もなく、国道197号線は「行くな¹⁹⁷（197）街道」とあだながついたほどのクネクネ道でした。バスがカーブを曲がる時には、車体の前半分ほどが道からはみ出して落っこちそうになるくらいで、とてもじゃありませんがバスの前方には乗れませんでした。にもかかわらず、当時は電車がなかったためにバス便と船が主要交通手段で、しかもバスは1日に3本、船は朝と夕しかありませんでした。

私の生年は1953年です。日本国中が今よりもずっと貧乏でしたが、佐田岬半島のような僻地は、なかでも特に貧しかったと思います。農業が主な生活手段ですが、半島全体が山脈となっているために農地もほとんどありません。かろうじて山を切り開いただんだん畑で、ミカンや芋を育てることができたほどです。山の麓が、すぐ浜になっているような地形でした。

瀬戸町には、医者もいませんでした。小さい頃の私は、鎌で麦を刈っていて指を切りつけたとき、石で叩いて汁を出したよもぎを傷口につけて治していました。傷はじきにすっかりとくつつきました。そのたびに自分の治る力は強いなあと思いました。なにせ無医村ですから、どうすれば治るかを自然に知っていくのです。子どもたちは多くの薬草を使いこなしていました。

ちなみに同一の町となった旧・伊方町には四国電力の原発である伊方発電所がありました。70年代に1号機が作られ、現在では合計3機で四国全体の電力の四割以上を賄っています。合併によって私の生地も原発の町となってしまいました。それも、町が貧しかったからだと思えます。福島原発のある大熊町、双葉町もそうかもしれないかもしれませんが、リスクを承知で、原発でも誘致しなければ豊かにならない町もあるのです。

伊方町に原発ができたときには、賛成派と反対派で町がまっぶたつに分断されて、最終的

に殺傷事件まで起きたと聞いています。私はその頃はすでに佐田岬には住んでいなかったのですが、もしいたとしたらきつと反対運動に加わっていたと思います。

私は、そんな瀬戸町のなかでも、すこぶる貧しい家に育ちました。なぜなら私がこの世に出てくる前、母が妊娠3カ月のときに、父が急に病気で亡くなったからです。父はまだ38歳の若さでした。

残された母は、祖母と子どもを、女手で育てていく羽目になりました。すでに6歳と3歳の男の子が2人いたこともあり、3人目なんて産んでいられないと思った母は、何とかして私を墮ろそうといろいろな努力をしました。

妊娠中に冷たい海で泳いでみたり、重い石を何度も持ち上げてみたり、大きなお腹を自分の手で強く叩いてみたり、とにかくお腹の赤ちゃんに悪いと思われることはすべて試してみたいそうです。

けれど、私は墮りませんでした。いま思うと、私もなんとかして生まれてきたかったんだと思います。しっかりと母の胎盤にしがみついて、とうとうこの世の中に生まれてきました。無医村だったので、人工中絶は免れたのです。もしお医者さんにかきだされていたら、さすがの私も死んでいたでしょう。

生まれてきたものはないと、母も私を家族に加えてくれました。死んだ父の名が

寅義で、父の代わりに生まれてきた子ということで、私は寅子と名づけられました。

けれど、私は子どもの頃、ずっと母や祖母や兄たちから、「おまえはいらん子だったのに生まれてきた」と言われ続けてきました。私は何とかして母に気に入られよう、必要な子になろうとして、必死に努力をしてきました。それでも、やはりあまり愛されているとは思えませんでした。

母は一家の家計を支えるために、私を産んだ直後から働き始めていました。朝7時に山の畑に出かけて、夜7時に帰ってくるのですが、その間、私は何も食べるものがありません。粉ミルクなんてぜいたく品もありませんから、白湯だけを与えられて母の帰りを待っています。夜になって母が帰ってくると、私はお乳にむしゃぶりつきます。もうお腹がぺこぺこなので一度吸いついたらいつまでも離さないので。

お乳をあまり与えられなかったために、私は乳離れが遅くなりました。離乳食が食べられるような月齢になっても、いつまでもおっぱいを飲んでいました。困った母は、芥子をお乳に塗ったそうです。芥子を塗られて、もちろん辛いのですが、それでも私はお乳から離れませんでした。

5、6歳になった頃、一緒に住んでいた祖母に「私ってどんな赤ちゃんだったの?」と聞いたことがあります。祖母は笑いながら「おまえはタコじやつた」と答えました。芥子を

お乳に塗られていたせいもあるのですが、いつも顔をかきむしって、顔がまっかだったことを、祖母は「タコ」と表現したのです。

「タコは自分自身の足を食べてしまうじゃろ。おまえも自分の顔を傷つけているから、余計にタコにそっくりじゃ」と笑われ、幼かった私はいたく傷つきました。

普通、おばあちゃんが孫に向かって「タコ」なんて言うでしょうか？

それを聞いた私は、またまっかになって怒りました。いま振り返ると、「ああ、やっぱり自分は愛されてなかったんだな」と感じます。いずれにせよ、このような環境下で育った私には、常に無力感と自己卑下の態度がついて回るようになりました。

「母」という人

私は母から愛情を受けたいと願っていましたが、とうとう最後まで私の望むような愛は得られませんでした。愛されてはいませんでした。私は母のことが大好きでした。

母は不憫な人でした。いつも自分の人生を恨んでいました。人生は苦しいもので、「二度と生まれてきたくない」とこぼしていたほどです。祖母もまた同じでした。2人とも、田舎で貧乏人の女性として生きることが辛かったのだと思います。

おわりに

自分自身を生きること

2011年3月11日午後2時46分、マグニチュード9・0の地震が東北地方の太平洋沿岸を襲いました。地震は津波を引き起こし、多くの町や村を一瞬にして消滅させ、多くの人命を奪いました。

そして、震災によって破壊された福島第一原発が、放射性物質を撒き散らし、日本国民はいまもなお放射能という見えない恐怖におびえています。

これを機に、私たちは原発を廃止していかねばならないと思います。自然を利用した安全で安心な発電システムを推進し、世界の手本になるべきです。

原発なしで電力の安定供給はありえない、と電力会社は言います。それは、本当でしょうか。私には疑問です。仮にそうだとしても、何とかして代替案を考えて、脱原発を進めねばなりません。前例がない、と政府は言います。しかし、誰かがあえてつくらなければ、前例はいつまでたつてもできません。

ホメオパシーの創始者、ハーネマンは「無知は罪である」と言いました。そして「あえて知れ」とも言いました。何が真実で、何が真実でないのか、知ることは容易ではありません。それでも、私たちはあえて知ろうとする態度を捨ててはいけません。

いまのあなたの行動に、子どもたちの未来がかかっています。

私は地震のあった3月11日に、日本ホメオパシー医学協会（JPHMA）ですぐさま緊急理事会を開き、翌日から東北へ緊急救援物資を届ける準備にとりかかりました。

1週間後の3月17日には、一度目の救援部隊が福島と仙台に入って、救援物資をホメオパシーの会員たちに手渡しました。

そして4月1日、全国の会員から集めた義捐金と、私たちスタッフの用意した義捐金、合わせて300万円を持って、二度目の救援部隊が東北に向かいました。3日間かけて東北各地の会員を励まし、福島、宮城、岩手の各県庁に義捐金100万円ずつを渡しました。

私が自分の目で見た被災地の現状は、想像を絶するものでした。

松も倒された／家も流された／太陽が／海が／いつものように光っている

自然はただ／そこにある／人間だけは／ただただ呆然と／立ち尽くす

あの命はどこに行ったのだろう

私に、いったい何ができるのか。

東北入りに際し、3月14日、私は細川律夫厚生労働大臣あてに次の旨の手紙を書きました。「いま、人命を救うために現代医学の救急部隊ががんばってくれていることと思います。被災者を救うための献身的な働きには本当に頭が下がります。そして、助かった被災者は、今度はトラウマに悩まされることとなります。家族を失った苦しみ、友人を助けられなかった痛み、自分だけが助かってしまったという罪悪感、それらを癒やすために、ホメオパスの助けが必要です。ぜひ私たちを被災地のためのボランティアとして役立ててください」

残念ながら、返事はありませんでした。

実は厚生労働大臣に手紙を書くのは二度目でした。

一度目は、2010年2月、長妻昭厚生労働大臣にあててのものでした。

その経緯は次のとおりです。

1月28日の予算委員会で長妻大臣は以下のように答弁しました。

「統合医療は、もう言うまでもなく、西洋医学だけではなく、伝統医学、漢方、鍼灸、温泉療法、音楽療法、芸術療法、心身療法、自然療法、ハーブ療法、ホメオパシー（原文ママ）などいろいろな広がりがあるものでございまして、厚生労働省といたしましても、この

二十二年度の予算でかなりこれまで以上に、研究分野の統合医療の研究について十億円以上の予算を計上しまして、その効果も含めた研究というのに取り組んでいきたいというふうに考えております。」

これを受けて2月5日、政府は「統合医療プロジェクトチーム」を発足し、JPHMAへホメオパシーの説明を求めてきました。

大臣にあてた「ホメオパシーに関する提言と説明資料」を2月22日に厚生労働省で手渡し、後にプロジェクトチームの官僚と直接お会いしてホメオパシーへの理解をいただけたことは望外の喜びです。

200年前、ドイツで生まれたホメオパシーは、現在、日本が研究においても実践においても最先端に行くようになりました。この本を上梓したあと、2011年10月には、茨城県つくば市で、JPHMA主催のホメオパシー国際カンファレンスが開催されます。子どもたちが安全に住める地球のあり方について、そして、ホメオパシーの多様な潜在性について、イギリス、アメリカをはじめ、世界各国のホメオパスたちが発表する予定です。

私は日本のホメオパシー業界をリードしてきた者として、これを誇りに思います。

ホメオパシーについては、本書でも言及しているようなバッシングがありました。その後私も一生懸命ホメオパシー復興を行っています。日本におけるホメオパシーの危機と

なった新聞記事を書かれた記者のみなさん、特に長野氏には、いまとなっては心からお礼を申し上げたいと思います。

なぜ私がそこまでホメオパシーにこだわるのか不思議に思われる方もいるでしょう。

答えは単純です。

私自身が死んだような身だったところを、ホメオパシーに救われて、生き返ったからです。そのため私は自分の命を神様に預けて、今後の人生をホメオパシーの普及に懸けることを決意したのです。そして人々が自己治癒力を使い自らが健康になれることを心から願っています。

私は今年で、58歳になります。息子や娘は一人身の私の老後を心配して「老齡基礎年金には加入しているのか」などと聞いてくるようになりました。

しかし、私は長生きすることにはあまり関心はありません。いまはとにかくすべきことをやって、お迎えが来たらころりと死ぬのがいいのではないかと考えています。

東日本大震災で思い知らされたように、人間、いつ死ぬかわかりません。明日死ぬかもしれないのであれば、今日できることは今日のうちにやっておきたいと思うのです。

私は、死ぬときに後悔したくありません。だから、正直でありたいし、自分が正しいと思うことを口にし、やるべきことをやりたいと思います。そうして、死ぬときには神様に「私

は一生懸命生きました」と胸をはって報告したいと思っています。

私は、私のできることをやります。あなたもあなたにできることをやってください。

そして、ベストを尽くしてあげたのだらだめでよいのです。

それは人生のすべてに関して言えることです。ただ結果だけがすべてで、結果がよくなければすべてが無駄というような、かつての私が持っていたような考え方は、あなたの人生を貧しくするばかりです。大事なものは、自分の命を生きられたかどうかです。

毒は、外にあるものではなく、私の心の中にしか存在しないものでした。私が私を傷つけていた、それがすべてだとわかったのです。それがわかってからは、毒は私自身の魂の汚れを教えてくれる本当にありがたいものとなりました。魂を磨き自分本来の命を生きられるようになるために毒はあったのです。

こうして私はホメオパシーに出合って、再び神様を信頼するようになり、何が起きても「よかった」と考えられるようになりました。

つらく苦しい人生でしたが、その経験はかけがえない贈り物であることがホメオパシーを通してわかったのです。私が私を傷つけることをやめ、どんな私でも受け入れ許し愛することを通して生きることが楽になっていきました。

ばかにされてもいいし、だめでもいいし、できなくてもいいし、間違ってしまったものは

しようがないし、自分を偽ってがんばらなくていいということがわかって、楽しみも苦しきもみんなありがたい日々です。

ホメオパシーに対するバッシングにしても、ホメオパシー利用者は減ったけれど組織がつぶれなくて「よかった」し、新聞社が騒いでくれたおかげで、ホメオパシーに対していわば厚生労働省公認の規制ができて業務範囲が決まって「よかった」し、仲間同士の団結力が高まって「よかった」と、よいことだらけの毎日です。

何より、食べ物をおいしく食べられることに、そしてそれを消化することのできる肉体をさずけられたことに心から感謝したいし、日々当たり前にある太陽や雨やありんこや鳥たち、そして人間たちに感謝せずにはいられません。

そして大いなる存在に生かされていることに大きな大きな愛を感じてやみません。

ホメオパシーの恩恵がすべてに降り注がんことを！

万物生命、その存在自体に感謝し

命そのものを生きられんことを！

2011年7月 由井寅子

参考文献

- 『医術のオルガノン 第六版』サミュエル・ハーネマン（ホメオパシー出版）
- 『真実の告白 水の記憶事件』ジャック・ベンベニスト（ホメオパシー出版）
- 『まだ科学で解けない13の謎』マイケル・ブルックス（草思社）
- 『アメリカの毒を食らう人たち』ロレッタ・シユワルツノーベル（東洋経済新報社）
- 『原発・正力・CIA―機密文書で読む昭和裏面史』有馬哲夫（新潮社）
- 『医療崩壊―私たちの命は大丈夫か』保阪正康（講談社）
- 『がん治療総決算』近藤誠（文藝春秋）
- 『がんのウソと真実』小野寺時夫（中央公論新社）
- 『心の潜在力 プラシーボ効果』広瀬弘忠（朝日新聞社）
- 『この世でいちばん大事な「カネ」の話』西原理恵子（理論社）
- 『「元祖」野菜スーパ強健法』立石和（徳間書店）
- 『ホメオパシー子育て日記』中村房代（ホメオパシー出版）
- 『ワクチノーシス』J・コンプトン・バーネット（ホメオパシー出版）
- 『予防接種は果たして有効か？』トレバー・ガン（ホメオパシー出版）
- 『予防接種へ行く前に「改訂版」』ワクチントーク全国（ジャパンマシニスト社）
- 『予防接種は「効く」のか？』岩田健太郎（光文社）
- 『予防接種トシデモ論』由井寅子（ホメオパシー出版）
- 『発達障害へのホメオパシー的アプローチ』由井寅子（ホメオパシー出版）
- 『インナーチャイルドが叫んでる！』由井寅子（ホメオパシー出版）

プロフィール

由井寅子（ゆい・とらこ）

ホメオパス博士
日本ホメオパシー医学協会 会長

1953年、愛媛県生まれ。プラクティカルホメオパシーカレッジ大学院（イギリス）卒。「日本ホメオパシー医学協会／英国ホメオパシー医学協会／英国ホメオパス連合」認定ホメオパス。ホメオパシー学術誌『The Homoeopathic Heritage International』B.Jain Publishing Houseの国際アドバイザー。ホメオパシーの実践と、ホメオパシーの創始者であるハーネマンの研究は世界的に評価され、21世紀のホメオパシーをけん引する指導的ホメオパスとしてますますの活躍が期待されている。著書、論文、訳書多数。主な著書に、『ホメオパシー的信仰』（ホメオパシー出版）など。

- 日本ホメオパシー医学協会
<http://www.jpghma.org/>

『愛じゃ！ 人生をかけて人を愛するのじゃ！』 由井寅子（ホメオパシー出版）
『それでもあなたは新型インフルエンザワクチンを打ちますか？』 由井寅子（ホメオパシー出版）
『ホメオパシー的信仰』 由井寅子（ホメオパシー出版）
『莊子・内篇』 由井寅子（ホメオパシー出版）
DVD 『症状はありがたい！』 由井寅子（ホメオパシー出版）
DVD 『人はなぜ病気になるのか？』 由井寅子（ホメオパシー出版）

毒と私

2011年7月27日 第1刷発行

著 者 由井寅子

発行人 久保田貴幸

発行元 株式会社 幻冬舎メディアコンサルティング

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7

電話 03-5411-6440 (編集)

発売元 株式会社 幻冬舎

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7

電話 03-5411-6222 (営業)

印刷・製本 日経印刷株式会社

検印廃止

© Torako Yui 2011 Printed in Japan

ISBN 978-4-344-99782-0 C0095

幻冬舎メディアコンサルティングHP

<http://www.gentosha-mc.com/>

※落丁本、乱丁本は購入書店を明記のうえ、小社宛にお送りください。

送料小社負担にてお取替えいたします。

※本書の一部あるいは全部を、著作者の承諾を得ずに

無断で複写・複製することは禁じられています。

定価はカバーに表示してあります。



9784344997820



1920095012001

ISBN978-4-344-99782-0

C0095 ¥1200E

定価（本体1200円+税）

発行：幻冬舎メディアコンサルティング

発売：幻冬舎

本書の主な内容

- 第1章 苦しみをのみ込むな!
- 第2章 自分を解放しろ!
- 第3章 気づけ! すべてがゆがんでいる!
- 第4章 目覚めよ! 事なかれ主義の日本人たち!
- 第5章 愛に生きろ!